



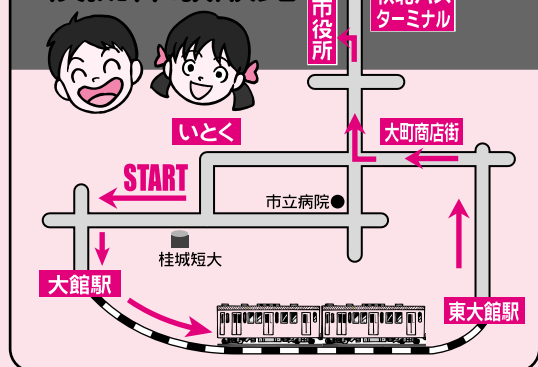
頼みはガイドヘルパーの誘導

点字ブロックを目安に歩きました



点字表示の切符売り場

視覚・聴覚障害者 模擬体験順路



手話を覚えれば、もっと会話も楽しくなるんじゃない？」

N「困った人を見かけたら、ためらわずに、手助けすることが必要だね。」

I「実際にインタビュウしてみても、外には不便なことが多いことがわかったよ。」

A「街並みで改善して欲しい場所を聞いたら、段差を無くして欲しいってあったけど、それって、私たちが普段何気なく歩いているだけだと気付くことって出来ないじゃん。だから、実際の道路状況を体験してみようよ。」

全員「賛成！」

体験

そこで、視覚・聴覚障害者の生活を少しでも理解するために、実際に目が不自由、耳が不自由という条件を作り出して体験してみることが一番だと思い、擬似体験を実施しました。

疑似体験では、障害者役とガイドヘルパーの2人に分かれ、障害者役をガイドヘルパー役が案内して大館市内の要所を歩いて回る方法をとりました。

視覚障害者役Hの感想

視覚障害者役Hの感想

体験前は、視覚障害者だって、普通に生活できると思っていました。ところが、9時から17時まで、擬似体験をしてみると、全く違いました。道が欠けていたり、ちょっとした段差があったりして、つまずいてしまい、大

変危険でした。

飲み物を買おうにも、自販機には点字表示がないので買えず、音のない信号機は、1人では危険でした。歩道が無い道路は、とても恐かったです。びっくりしたのは、歩道に立ってかけられている旗。普段何気なく見ている旗が、いきなり顔に当たってしまいました。

体験中、ガイドヘルパーと常にコミュニケーションをとらないと、孤独で寂しさを感じました。危険な所があったらガイドヘルパーに早めに教えてもらい、常にコミュニケーションをとりながら行動することが、必要だと感じました。

ガイドヘルパー役Tの感想

障害物などを早めに教えなければならぬのでとても神経を使い、疲れしました。

聴覚障害者役Iの感想

聴覚障害者役Iの感想

両耳に耳栓をしました。人が話し声などが聴こえていたので、さらに綿を詰めて、テープで固定し、ヘッドホンをした状態で朝の9時から17時まで8時間過ごしました。聴覚に障害があると、視覚情報だけを頼りに生活しなければならぬので、とても大変でした。

列車に乗っても、耳が聞こえれば車内の案内放送を頼りにできますが、聴こえないため何番目の駅で降りるかを記憶し、さらに各駅で駅名を確認していなければなりません。今回は1駅でしたのであっとい間でしたが、遠出のときは大変だろうと感じました。